

## プログラム・ノート

片桐卓也 (中村作品を除く)

チェンバーミュージック・ガーデンの最後を飾るフィナーレは、毎回、その年の他の公演に参加したアーティストを含め、豪華なメンバーの饗宴となる。今年も邦楽器を含むひじょうに多彩な楽器と作品を、トップ・アーティストたちの演奏により楽しむことができる。またサントリーホールが主宰する室内楽アカデミーに在籍する若者たち、その先輩たちの演奏も次の時代を感じさせ、フィナーレに彩りを添えるだろう。

### モーツァルト：弦楽四重奏曲第17番 変ロ長調 K. 458 「狩」より 第1楽章

先輩であるヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)を追うように、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)は弦楽四重奏曲のジャンルにおいて当時としては最先端の作品を送り出した。この第17番はハイドンに捧げたいわゆる「ハイドン・セット」全6曲のなかの4番目の作品で、1784年11月に完成した。「狩」の通称で呼ばれるが、それはここで演奏される第1楽章の冒頭に登場する主題が、狩のときに使われる角笛の響きに似ていることから名付けられた。アレグロ・ヴィヴァーチェ・アッサイ、変ロ長調、8分の6拍子による音楽は作曲当時の聴衆の好みに最もフィットした音楽であったとも考えられていて、興味深い。

### ブラームス：ピアノ三重奏曲第2番 ハ長調 作品87 より 第2楽章

ドイツ・ロマン派の代表的作曲家であるヨハネス・ブラームス(1833～97)は4つの交響曲などが代表作として知られるが、室内楽にも傑作を数多く残した。ピアノ三重奏曲第2番は1880～82年にかけて書かれ、1882年12月にブラームス自身がピアノを担当してフランクフルトで初演された。全3曲ある彼のピアノ三重奏曲のなかでも円熟期に書かれたこの曲は、ブラームスという人の個性をよく表現した傑作と言われる。第2楽章はアンダンテ・コン・モート、イ短調、4分の2拍子。深い情熱を込めた2本の弦楽器のメロディを厚い和音でピアノが支えており、全体が明るいこの作品のなかで最もロマンティックな表情を持っている。

## 中村匡寿：「ミミック」バルトークの『中国の不思議な役人』のモチーフによる (2024)

〔世界初演 本條秀慈郎委嘱〕

委嘱者である本條秀慈郎氏によってバルトークの『中国の不思議な役人』のモチーフを使うことが提案された際、この具体的なアイデアにはどのような意図が込められているのかを考えた。しばらくスコアを眺めるうちに無意識に谷崎潤一郎の耽美主義を感じていることに気付いた。ある日秀慈郎氏からの電話の中で「どんな譜面でも弾く」と言われた瞬間に、彼は『春琴抄』の佐助なんだとはっきりと合点した。春琴による猟奇的な三味線指導の描写と倒錯した男女関係と偏狂的な師弟関係がバルトークの音楽と重なった。渡辺玲子氏の圧巻の技巧は春琴を表現するに充分すぎる。

バルトークが描いたこのデカダンの美は三味線音楽が見る憧憬のひとつなのかもしれない、と私は秀慈郎氏の内なる声を邪推した。答え合わせは不要である。

中村匡寿

## ボルヌ：ビゼー『カルメン』の主題による華麗な幻想曲

フランソワ・ボルヌ(1840～1920)はフランス、トゥールーズ出身のフルート奏者で、ドイツの楽器発明家テオバルト・ベームが開発したフルートのためのキー装置(機械式のふたで管の音孔をふさぐ装置)、いわゆる「ベーム式システム」を用いたフルートの発展に寄与した人とされている。彼の残した作品でよく知られるのは、ボルヌの生きた時代に流行したオペラからのフルート用編曲作品で、特にジョルジュ・ビゼー(1838～75)の遺作となったオペラ『カルメン』(1875年初演)の主題を使ったこの『華麗な幻想曲』は多くのフルート奏者が取り上げている。

オリジナルの編成はフルートとピアノだけれど、今回はフルートとハープによる編曲で聴く。ハープの弾く第1幕のカルメンの登場シーンの音楽から始まり、このオペラの名場面の音楽をかなり自由に繋げつつ、フルートの流れるような名技を楽しめるように音楽が構成されている。もちろん「ハバネラ」などのアリアも登場する。

## ラヴェル：序奏とアレグロ

フランス近代を代表する作曲家モーリス・ラヴェル(1875～1937)はどのジャンルでも傑作を残したが、単に優れた作品というだけでなく、ラヴェル独特の「細工」がそれぞれの作品に施されていて、何度聴いても、その丁寧でアイディア溢れる仕事ぶりに驚きを感じる。この『序奏とアレグロ』もそうである。その編成はフルート、ク

ラリネット、ハーブ、弦楽四重奏で、室内楽と言うよりも、この後に演奏されるマルティヌーの協奏曲(コンチェルティーノ=小さな協奏曲と表記されることもある)よりさらに小さな編成の「合奏協奏曲」とも思えるし、ある研究者は「小型のハーブ協奏曲」と位置づけている。と言うのも、この曲はエラル社の委嘱によって書かれたからだ。

作曲は1905年。当時、ダブル・アクション方式のペダル付きハーブを開発したエラル社。その新しいハーブのための新作である。一方、ドビュッシーはエラルのライバルであるブレイエル社から、新型のハーブのための作品を依頼され、それは『神聖な舞曲と世俗的な舞曲』として発表された。

『序奏とアレグロ』は序奏部を持つ単一楽章(ソナタ形式による)の作品であり、「序奏」に出て来る主題がソナタ形式の「アレグロ」にも利用され、またハーブのカデンツァも登場する華麗な作品に仕上げられた。アレグロ部分のリズムは、複雑であるのに推進力を持っており、ラヴェルの創意工夫が感じられる。

### マルティヌー：ピアノ三重奏と弦楽オーケストラのための協奏曲 H. 231

チェコに生まれ、ヴァイオリン奏者として活躍した後、パリでアルベール・ルーセル(1869～1937)に作曲を学んだポフスラフ・マルティヌー(1890～1959)は、ナチス・ドイツがドイツで政権を握ると、チェリストのピエール・フルニエ(1906～86)などの勧めでアメリカに渡り、故郷に帰ること無く、作曲活動を続けた。そのため、祖国でも評価が遅れたが、近年は様々な演奏家たちによってその作品が再評価され、演奏機会も増えて来た。

このピアノ三重奏と弦楽オーケストラのための協奏曲 H. 231は1933年に書かれた。マルティヌーはピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロなどのための協奏曲を書いている他、弦楽四重奏と管弦楽のための協奏曲、複数のソロ楽器のための協奏交響曲なども書いており、多作な作曲家としての一面を見せている。ピアノ三重奏と弦楽オーケストラのための協奏曲も実は2曲あり、ほぼ同時期に書かれたとされている。2曲とも全4楽章から構成される作品で、この時期にマルティヌーが強い関心を持っていたバロック時代に流行したコンチェルト・グロッソ(合奏協奏曲)を20世紀に蘇らせた作品と言える。H. 231は全体で25分ほどの長さを持つが、戦争に向かう時代の緊張感をそのスコアのなかに常に漂わせている。

## エルガー：ピアノ五重奏曲 イ短調 作品84 より 第2楽章、第3楽章

イギリス音楽の新しい時代を切り開いたエドワード・エルガー（1857～1934）は『威風堂々』やチェロ協奏曲、2曲の交響曲などが現在でもよく演奏されており、室内楽においてもヴァイオリンとピアノのための可憐な小品『愛の挨拶』や、ヴァイオリン・ソナタ、弦楽四重奏曲などの作品が残されている。このピアノ五重奏曲は彼の作品の中では演奏機会の少ない作品だけれど、1918年、第一次世界大戦が終わりを迎えた年であった年に書かれた。同時期にヴァイオリン・ソナタなども書かれているので、エルガーの中では、こうした一連の室内楽作品を書くことは平和への希求と関係していたのかもしれない。初演は1919年5月であった。

ピアノ五重奏曲は全3楽章で、それぞれの楽章が10分ほどの長さを持つ大作。今回演奏されるのは第2楽章アダージョ、第3楽章アンダンテ～アレグロである。第2楽章は穏やかな歌、第3楽章の冒頭部アンダンテは少し重さと暗さを感じさせるが、アレグロは力強さを感じさせるダイナミックな展開を持つ。しかし、中間の部分はかなり叙情性を込めた音楽になっており、作曲当時のエルガーの心情を思わせる。

## 三瀬和朗：『暁月夜』

フィナーレの締めくくりは三味線とチェロのための作品である。作曲をした三瀬和朗（1947～）は東京藝術大学作曲科、同大学院を卒業後、パリのエコール・ノルマル音楽院に留学し、作曲科を修了。最高位ディプロマを授与されている。1985年ヴィオッティ国際作曲コンクールで第1位を受賞。桐朋学園大学で作曲を教えている。

この作品のタイトル『暁月夜（あかつきづくよ）』は万葉集から採られたと三瀬は書いている。元の歌「しぐれ零る暁月夜紐解かず 恋ふらむ君と居（お）らしものを」は万葉集巻十の相聞歌。「三味線を使って新曲を書くことになったが、初めて触れる楽器である三味線にとっても苦労した」と三瀬。友人から三味線を借りて自分で弾いてみたり、三味線のDVDを観たり、楽譜を読んだり。三味線とのデュオで合う楽器を考え、チェロとのデュオで音楽を想像したら、なんとか筆が進んだようだ。本條秀慈郎の三味線と堤剛のチェロの様々な奏法による音色の彩りが、古歌の世界を蘇らせる。

（かたぎり たくや・音楽ライター）